

## ロマネスク時代の巡礼

小澤実 歴史家

Minoru Ozawa

フランス南西部のシャラント・マリティーム県に位置するオルネー。ボワティエとボルドーのあいだ、といえばかりやすいだろうか。現在の人口二〇〇〇〇人にも満たない小さな町である。

今までこそ地方の小邑であるオルネーの歴史は古い。ローマ時代にはアントニヌス街道という幹線道路の駅町として知られた。ガリアのアウネドンナクムである。このオルネーを含むボワトゥ地方は、ローマ街道が貫いているために、諸民族の交錯する地でもあった。西ローマ帝国の終焉後、中世のはじまりにおいては、二度の大きな戦いを経験した。ひとつは五〇七年のヴィエの戦いである。メロヴィング朝フランク王国の国王クローヴィスが西ゴート人を打ち負かし、イベリア半島へと追いやつた戦いである。もうひとつは七三二年、言わばと知れたトゥール・ボワティエ間の戦いである。イベリア半島から駆け上ってくるイスラーム勢力を、フランク王国の宮宰カール・マルテルが破つたとされる戦いである。いずれもその後のフランク王国の歩みを決定した決戦として、教科書にも記載される。その後、カール大帝は、ボワトゥ伯領を設置した。成長したボワトゥ伯は、街道を支配する有力地方領主として、同時代の政治ゲームで不可欠のプレイヤーとなる。このボワトゥにあるオルネーの名前が、歴史上ふ

たたび浮かび上がつてくるのは一〇世紀である。この地は、フランス南西部に割拠する領邦君主ボワトゥ伯のもと、周辺領域の支配を担う副伯の拠点であった。このオルネー副伯も、戦乱の時代に群雄割拠する地方領主のひとつであった。

オルネーの教会は、聖ペテロの名前を冠したサン・ピエール教会とい。ボワトゥ司教区の一部であり、もともとはボワトゥにあるサン・シプリアン修道院に属していた。建物の基礎づくりは、中世フランスの支配王朝であるカペー朝の三代目、アンリ一世（在位一〇三二—六〇）の時代に着手された、とするのが現在の判断である。これまで紹介してきた他の教会と同様、封建社会がかたちを整えようとするそのなかで、サン・ピエール教会も生まれてきたのである。

教会は何度も衣替えをする。現在の教会のかたちになったのは、一二世紀の初頭である。その後一二二二年、地域の中心都市ボワティエにかつサン・ピエール大聖堂の参事會に従属することになった。

る。

一一世紀から一二世紀にかけて、このサンチャゴへむかう巡礼者が急増した。キリスト教徒にとって、これまでもつとも人気の高かった巡礼地はエルサレムとローマであった。名実ともにキリスト教の聖地であるこれら二大巡礼地にサンチャゴをくわえて、三大巡礼地と称されるようになる。

巡礼は、もともと、自らの犯した罪を償うために、教会により科せられた懲罰行為であった。罪を贖う

界をつなぐ経済センターだったからである。しかし、それだけではない。ロマネスク時代に特有の理由もある。この都市が、サンチャゴ・デ・コンポステラにむかう巡礼路上に位置していた、という理由である。

サンチャゴは、イベリア半島北西部、ガリシアに位置する。九世紀、ここで一二使徒のひとり、聖ヤコブの遺骨が発見された、との噂は、ひとびとの関心を引きつけた。七一年にゲルマン部族国家のひとつ西ゴート王国が、地中海を超えて到來した後、マイヤ朝により滅亡したのち、イベリア半島の大部

分はイスラーム世界の一部となつていた。しかしその後、イベリア半島北部に残っていたキリスト教国により再征服運動、いわゆるレコンキスタがはじまり、半島各地で戦闘が繰り返された。このようなるか、マタモーロ（イスラーム教徒殺し）という物騒な別名もつた聖ヤコブに対する崇敬は、一段と高まつたのである。もちろん聖ヤコブはキリストの一二使徒のひとりでもあるため、そもそもの人気が高い。

サンチャゴとは、現地の言葉で聖ヤコブのことである。

る。

今でこそ地方の小邑になつたとはい、ロマネスク期のオルネーは、この地域としては目立つ町であった。すでに見たようにこの町は、ローマ時代以来の幹線路上にあり、地域と地域、地域とその外の世界をつなぐ経済センターだったからである。しかし、それだけではない。ロマネスク時代に特有の理由もある。この都市が、サンチャゴ・デ・コンポステラにむかう巡礼路上に位置していた、という理由である。

流浪の旅、である。夜盗が跳梁し疾病が命取りになる中世における遠距離への道行きは、それこそ、命がけであった。しかし、ロマネスク時代における巡礼者の増加は、巡礼の条件に大幅な変更を迫った。つまり、旅の安全の確保である。具体的には、巡礼路と宿泊施設の整備である。

サンチャゴへの巡礼路は、いつたんスペイン北部の都市ブエンテ・ラ・レイナにはいつてしまえば、あとは一本である。しかし巡礼者はキリスト教世界のいずれにもいる。フランスからピレネーを越えてブエンテ・ラ・レイナへの経路は、さまざまであつた。実はこのサンチャゴへの巡礼路の素の姿を知るにあつて、格好の史料がいまにつたわつていている。一二世紀半ばにフランスで編まれたとおぼしき『巡礼案内書』と名付けられた写本「聖ヤコブの書」は、窃盗団に盗難されたことで一躍時の写本となつた（のち、犯人から無事に回収された）。そんな写本の一部を構成する「巡礼案内書」は、ロマネスク時代を知るにあつて避けては通れない史料である。柳宗玄や渡辺昌美といったロマネスク時代を代表する美術史家や歴史家も、わざわざこの史料に基づいて一冊を物している。ここでは柳の訳文に従つて、内容を追つてみよう。

「サンティヤーゴへの道は四本あり、それらはスペイン領土にある。ブエンテ・ラ・レイナで一本に合流

する。その一本はサン・ジル（デュ・ガール）、モンペリエ、トゥルーズおよびソンボールを経由する。次の一本はル・ピュイのノートル・ダーム、コンクのサント・フォワおよびモワサックのサン・ピエールを、さらに別の一本はヴェズレーのサント・マリー・マドレーヌ、リムザン地方のサン・レオナル、そしてペリグーの町を通る。さらなる一本はトルのサン・マルタン、ボワティエのサン・ティエール、アンジェエリのサン・ジヤン、サントのサン・テウトロップ、そしてボルドーの町を通る。

サント・フォワを通る道、サン・レオナルを横

切る道およびサン・マルタンを抜ける道は、オスターで合流し、スィーズの峠を越えたあと、ブエンテ・ラ・レイナでソンボール峠経由の道と合流する

」

サンティアゴに向かう道がフランス内に四本あることが理解できると同時に、経路の目印のおおくが都市名ではなく教会名であることに気づく。そしてロマネスクに関心のある人ならば、コンク、モワサック、ヴェズレーをはじめとする地名にピンとくるだろう。いずれもロマネスク美術の本をひもとけば、かなりぞ掲載される宗教芸術をかかえる信仰の場だからである。

わざとらしいほどにべた褒めである。これに対しボルドーは、「ぶどう酒がうまく魚が豊富だが、言葉が乱暴である。サントンジュの人たちもすでに話し方が荒々しいが、ボルドーの人たちは、それに輪をかけている」し、ガスコーニュ人は「口が軽くしゃべりで、からかい好き、ふしだら、酒好き、食いしんばう、ぼろを纏ついてみすばらしく、金を持たない」と、散々な評価である。ボワトゥの評価を高め、それ以外の西南フランスの土地の評価を下げる『巡礼案内書』の筆者は、おそらくはフランス

ぞつて集う幹線路である。ロワール川ぞいにあるオルレアンからトゥールへ、そしてボワティエ、サン・ジヤン・ダンジエリ、サント・ブライユ、ボルドー、ブラン、ダックス、オスタバ、そしてピレネーを超えるという経路である。オルネーはそのボワティエとサン・ジヤン・ダンジエリをつなぐ小路のひとつにのる。

面白いことに、『巡礼案内書』は、巡礼路沿いの人たちの気質もしるしている。なかでも、オルネーのあるボワトゥ地方は別格である。

「トゥールを過ぎてからボワトゥ地方に入るが、この地方は肥沃ですばらしく、良いこと一杯である。ボワトゥ地方の人たちは、たくましく優れた戦士で、戦場では弓矢や槍の使い方がうまく、戦に臨むと勇敢で、走るのが速く、身だしなみは優雅、美貌、信心深く、人をもてなす心が極めて豊かである。さらに先へ進むとサントンジュ地方に入る」

われらがオルネーは『巡礼案内書』でいうところの第四の道、つまりトゥールからオスタバを経てシーズ峠を超える「トゥールの道」のそばにある。「トゥールの道」は、北フランスからの巡礼者がこ

のなかでもボワトウゆかりの人物なのであろう。隣接するボルドー、ガスコニーに辛いのは、お国自慢のところもちなのか、それとも隣り合うからこそ恨みつらみが蓄積されてのことなのか。フランスからの経路を詳細に述べているがゆえに、ボルドーやガスコニーの出身者たって『巡礼案内書』を読むと思うのだが、ボワトウ以外は構成無しといふのは、ある意味いさぎよい。

巡礼は本来、自らを罪から淨めるための宗教的行為であることは先ほど確認した。『巡礼案内書』は、そうした一二世紀の人々の信仰心の実現を手助けする便利な道具であることは確かである。しかし、巡礼は、ただの苦行でも精神修養でもなくなっていた。目的地へむかう数ヶ月という期間、それまで見たこともない土地の景観を、水を、食を、ひとを、その

五感で愉しむ経験でもあつたし、その五感で愉しんだ経験を故郷に持ち帰り、家族や親類、同郷の仲間たちと共有することで、ともすれば単調となりがちな日常に彩りを添える機会であつたと言えるかも知れない。だからこそ、『巡礼案内書』は、巡礼者が訪れるであろう教会の来歴だけではなく、巡礼者が通る土地の情報も書き込まっているのではないか。

観光という言葉はまだないが、旅を愉しむ心はたしかにそこにあつたはずだ。たとえ道中に盜難、大怪我、病、そして死といった大きな危険があつたとしても、である。そして、道すがら立ち寄るあれこれの町を彩る教会こそが、巡礼者にとっての目的地となっていた。そうでなければ何万という人たちが、命の危険を冒してまでガリシアの辺境に向かつて押し寄せる理由などないではないか。

ロマネスクの教会を巡つてみると、なぜこんな鄙びたところにこれほどまでに素晴らしい教会が建つているのだろうと思うことが、しばしばある。しかし、交通網も移動手段も中世とは大きく変わつてしまつた現在のわたしたちの感覚である。巡礼路にたつ教会は、時速四キロメートルで歩く人間が、そこに立ち寄り、そこで安らい、そこを記憶に留めることを願つて造られた。地域の住民にとっての祈りの場であると同時に、生涯に一度しか立ち寄らないかもしれない無数の巡礼者の一期一会を積み重ねる場である。

鄙びた空気になじむオルネーのサン・ピエール教会もまた、そんな過去の光景を思い起こさせる無数の小教会の一つである。